

地域密着型探究活動

（SDGsの視点とともに）

地域を支える人財の育成（）

茨城県立三和高等学校

探究企画部長 酒井 健志

一 本校の現状

本校は昭和六十一年に、地域の要望により普通科の高校として開校した。「誠心・精励・澁刺」の校訓の下、豊かな人間性を持つ人財の育成を目指している。

令和三年度からは三クラスの募集となった。二クラスは進学にも対応している総合コース、一クラスは体験授業を充実させたヒューマンサービスコース（HSコース）となっている。いずれも「学び直しのできる学校」を合言葉に、基礎学力の定着と体験型授業を取り入れた学習活動を展開している。さらにHSコースでは就業体験、介護福祉、伝統文化、ユニバーサル・スポーツなど、将来の就業や社会情勢、生徒の進路希望を考慮した体験授業を多く組み込んだカリキュラムとなっている。

卒業生の進路は例年、大学・短大・専門学校への進学が約三割、就職が約七割となっている。本校では多くの卒業生が近隣地域の事業所や専門学校に就職、進学している。親や兄弟が三和高出身というケースが多いことから、卒業後も近隣地域で暮らしていることが窺え、特徴と考えられる。

本校生を一言で表すとすれば、「素直」という言葉が最初に思い浮かぶ。学びに対するモチベーションが高くない生徒もいるが、教員の指示を理解し、行動できる生徒が多いように感じる。また学校行事としてのボランティア活動や、日ごとの清掃活動に熱心に取り組む生徒の様子から、自分の力で社会に貢献したいと思う生徒が多いということが窺える。そして令和二年度、三年度の休校にもなうりモート学習などではICT機器への対応が早く、取り組む姿勢も大変良いと感じている。

二 新学習指導要領への移行と教育改革

本校では令和四年度入学生から始まる新学習指導要領に基づくカリキュラム構築に向け、三カ年連続した総合的な探究の時間をデザインするための部署として探究企画部を令和二年度に設立した。探究企画部が教育活動の立案と運営、外部連携の構築、カリキュラムや教科横断型学習の調整を主導しており、部長一名と他分掌兼務の一名、計二名での体制である。

本校の総合的な探究の時間の学習活動は、先述のとおり「多くの生徒は卒業後も近隣地域で暮らす」、「素直な人間性」、「社会に貢献する気持ち強い」といった生徒の特徴や、「地域を支える人財育成」、「豊かな人間性の育成」、「地域に必要とされる学校づくり」、「SDGs」といった学校のミッションなどをベースとした。特にSDGsについては「ふと見下ろした足先の景色から繋がるSDGs」というキーワードが生まれ、全世界的な目標を「ジブンゴト化」し、自分たちができる身近なことから始めることとなった。

こうして、「世界という大きな視野を持つたうえで、地域という狭いエリアを深く学び、地域を支える人財を育成する」、「世界と地域、世界と私たち、個々の教科や学習活動を結び付けるためにSDGsを活用する」という方針を固めた。

三 三カ年の学習計画

従来、本校では生徒のニーズに応じた教育活動が行われていた。一年次十二月実施の進路別バス見学会（大学や専門学校、事業所などに希望毎にバス見学）や、二年次六月実施のインターンシップ（三日間の就業体験）、三年次の会社調べや面接指導などである。三カ年の学習計画立案にあたり、既存の総合的な学習の時間で実施していたキャリア教育をベースに、「進路実現がゴールではない」、「その進路で自分は何を支え、何に影響を与えているか」など、他者や地域との関係を考えさせるものにする事が図られた。「地域を支える人財育成」という視点



を加え、なおかつ個々の行事や学習に「つながり」をもち、教科横断の橋渡しになるものが、三和高校にふさわしい探究活動であると結論づけた。そして新しく加わる行事や学習では、これそのものにより期待される学習効果があることはもちろんのこと、既存・既習の教育活動との相互作用により、さらなる教育効果が向上するように配慮することとなった。相乗効果を図るためには、しっかりとした方針と、個々の行事や学習のつながりが必要になる。すなわち先述の「世界という大きな視野を持つたうえで、地域という狭いエリアを深く学び、地域を支える人財を育成する」、「世界と地域、世界と私たち、個々の教科や学習活動を結び付けるためにSDGsを活用する」という方針がブレないことが重要である。これを踏まえ、「SDGsの系統学習」と「課題研究」を新規に追加して実施することとした。

	既存の総合的な学習の時間（キャリア教育中心）	新課程・総合的な探究の時間（追加する活動）
1年次	道徳 進路学習基礎 進路先バス見学会	SDGs2030 ワークショップ
2年次	インターンシップ （就業体験） 進路調べ学習	環境学習を兼ねた ボランティア活動
3年次	企業調べ 面接練習 自己振り返り	SDGsDE地方創生 ワークショップ 課題研究

一年次「SDGs2030ワークショップ」はカードゲームを通してSDGsの意味を理解し、世界的な視野を獲得することを目的にするとともに、各科目でSDGsを扱う契機になるよう考えた。系統的なSDGs学習の入門である。三年次「SDGsDE地方創生ワークショップ」は学習が進んだ上で身近な地域の行政施策や社会参画が求められる内容となっており、レベルも高く、

方針達成の指標となる。

二次「環境学習を兼ねたボランティア活動」はゴミ拾いのボランティアを行うと同時に地域の環境学習を行うものである。本校校歌の歌い始めは「清き流れの西仁連に」と校舎横を流れる西仁連川を称えており、令和三年度はその最上流部である小山運動公園（栃木県小山市）付近と、最下流部である菅生沼天神山公園付近（坂東市）に行き、ゴミ拾いのほか、捨てられているゴミの考察や動植物の観察などを実施した。

そして三年次四月からスタートする「課題研究」を総決算として位置づけた。

なお、これらの学習計画は本校の県立高校等チャレンジ・プロジェクトの主な取り組みとなっており、三和高校は令和三年度から強化校（プロフェッショナル型）に指定されている。

四 「課題研究」で進路決定へ向けた学びの総決算

三和高校の課題研究は、「STAMP」(Samwa Tankyu Mirai Project) とよばれ、「地域を知り、地域に学び、地域で暮らす」をキャッチフレーズに展開している。

令和四年度入学生がすべての学習内容を経験・体験でき、体制や連携を確認し、万全の状態を開始できるように先行実施すべく、令和二年秋に令和三年教育課程編成の変更を申請し、年が明けた二月から急遽始動し、令和三年度に初回を実施した。

2回目となる今年度は「地域文化ゼミ」、「人文科学ゼミ」、「自然環境ゼミ」、「医療福祉ゼミ」の四つのゼミで活動している。主な研究テーマには「近隣市町村のお祭り」、「大橋醤油を使ったスイーツづくり／名産物作りで地域活性化」、「水害ジオラママップづくり」、「西仁連川の水生生物調査」、「産前産後の肌との向き合い方について」などがある。各ゼミではテーマごとに三〜六人数のグループに分かれて研究を行っている。テーマ決定に際しては、前年に研究した上級生の発表会や情報伝達会を経て、前年のテーマ系統グループを選択することから開始した。その後グループ内で生徒と話し合い、生徒

の希望を反映し決定した。

教員には専門性が不要であること、ファシリテーターとして活動すること、生徒の活動に対して無理強いしないこと、生徒の活動を見守り成果を求めないよう要望している。学術的に価値がある研究にならなくても、自主的なテーマ決定や考察などを経て、これまでの進路学習や調べ学習と比較して思考や協働、まとめが深くなるのは当然だ。また、地域を深く知ることにより、就職面接など、地域の方々と話す場面において自信が持て、言葉に説得力が出ることを期待している。

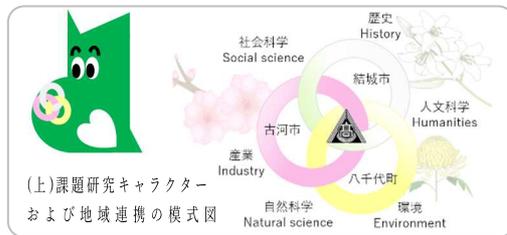
課題研究の成果は、十一月の学校公開の際に、本校の一、二年生や教職員のほか、参加を希望する中学三年生やその保護者、公機関や企業の方々の来賓を聴衆とし、ポスターセッションにて発表する。

五 課題研究における地域連携

課題研究を進めるにあたり、古河市役所商工観光課、境町観光協会などの公共機関や、大橋醤油店など地域の企業に協力していただいている。また市役所内での担当課の幹旋を古河市役所シテイプロモーション課に、さらに課題研究全般のアドバイスを筑波学院大学にお願している。

市役所や町役場は若者の外部流出や高齢化、地域の衰退などに危機感を抱いており、特に高校卒業後に地域に残り、生活していく若者に対しての関心が相当高いと感

惜しまず、快く協力してくださっている。課題研究で地域と関わりを持つことにより、本校の広報にもつながる。地域に必要とされる学校であり続けるためにも、今後も自治体や企業との連携を増やしていきたいと考える。



六 先行実施で得られた活動の効果

令和三年度教育課程を変更して臨んだ本校初の課題研究は、秋の学校公開において一学年道徳「豊かな心意見発表」、二学年「環境学習を兼ねたボランティア活動のまとめ発表」とともに、ポスターセッションで実施した。発表はこれまで前面に出ることが少なかったであろう本校生徒にとって不安であったが、堂々とした態度に安堵した。前例がない初回のため、イメージが湧かず、また四月に入ってからゼミ構成、テーマ選定とスタートが遅くなり、時間的に余裕がなかった。しかし市役所に電話し、インタビューで街中に出掛け、施設で入所者と触れ合い、ポスターをまとめ、作品を制作し、最後に自信に満ちた顔で発表した姿から、探究学習の効果を実感できた。

七 今後に向けた課題

本校探究活動の初動は、専門の部署による周到な現状分析と準備の結果、実態やミッションに適したものであり、かつ各教育活動に一層のつながりを持たせることができたと思われる。今後のさらなる充実のためには、各活動をさらにブラッシュアップさせていく必要がある。なかでも「課題研究の年間計画の前倒し」と「学校行事の再構築」、「地域社会に役立つ研究や施策の提案」、「継続研究による研究深化とそのテーマ選定」、「生徒の研究意欲の醸成」などがあると考えられる。

またこれら探究活動を、小中学校と協働で実施するなど連携を強化し、三和高校の魅力発信と今後の発展に向けた足がかりにしていきたいと考えている。三和高校が今後も地域に必要とされる学校であり続けるために、今後も努力していきたい。

